

2020. 1. 1 元旦礼拝

ヨシュア 3:14-17「ヨルダン川を渡る」

聖書

14 民がヨルダン川を渡ろうとして彼らの天幕から出発したとき、契約の箱を担ぐ祭司たちは民の先頭にいた。

15 箱を担ぐ者たちがヨルダン川まで来たとき、ヨルダン川は刈り入れの期間中で、どこの川岸にも水があふれていた。ところが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際の水に浸ると、

16 川上から流れ下る水が立ち止まった。一つの堰が、はるかかなた、ツアレタンのそばにある町アダムで立ち上がり、アラバの海、すなわち塩の海へ流れ下る水は完全にせき止められて、民はエリコに面したところを渡った。

17 主の契約の箱を担ぐ祭司たちは、ヨルダン川の真ん中の乾いたところにしっかりと立ち止まった。イスラエル全体は乾いたところを渡り、ついに民全員がヨルダン川を渡り終えた。

はじめに

2020年明けましておめでとうございます。昨年のお祈りに感謝して、今年も宜しく願い申し上げます。一年の出発にあたり、ヨシュア記3章のヨルダン川渡河の記事から励ましをいただきたいと願っています。ヨルダン川渡河とは、イスラエルの民がヨルダン川の東側から西側に渡って、カナンの地に入る時の出来事です。カナンの地は神さまがイスラエルに与えると約束してくださった土地ですから、約束の地に踏み出す最初の難関ということになります。このヨルダン川渡河と私たちの2020年の歩みを重ねることで、ここから学ぶことが今年の私たちの力となるのです。

1. まず立ち上がること

イスラエルの民は40年間の荒野の生活を経て、ヨルダン川の東側にまで来ました。これまで民を導いて来た偉大な指導者モーセは死に、次の指導者と

して立てられたヨシュアに、主はこのように仰いました。「わたしのしもべモーセは死んだ。今、あなたとこの民はみな、立ってこのヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの子らに与えようとしている地に行け。わたしがモーセに約束したとおり、あなたがたが足の裏で踏む場所はことごとく、すでにあなたがたに与えている。」(ヨシュア1章2,3節)。このみことばには、「立って」「渡り」「行け」という3つの動詞があり、約束の地に踏み入るためには、今いる場所・状況から立ち上がらなくてはなりません。そしてヨルダン川を渡るという難関を突破し、約束の地に入っていくわけです。ヨシュアはこの神さまの命令に忠実に従い、今まさにヨルダン川を渡ろうとしているのです。

さて、私たちはこの年、立ち上がらなければならないような課題を抱えているでしょうか。長年抱えている課題に終止符を打って立ち上がらなければならないと感じている人がいるでしょうか。または、近年心に示されていることに対して一歩行動に移さなければと思う方がいるでしょうか。「立つ」という行為はこの年の私たちの歩みを決定づける象徴的なことばだと思います。これまでの、または今の状況に対して、何らかの変化を期待するなら、まずは立たなければならないのです。皆さんは礼拝が終わると、席から立って教会を出て行きます。いつまでも会堂に座っていたら、新しい歩みは始まりません。まずは、立ちましょう。

2. 先頭に立って導く神

ヨシュアは民に命じました。「あなたがたの神、主の契約の箱を見、さらにレビ人の祭司たちがそれを担いでいるのを見たら、自分のいる場所を出発して、その後を進みなさい。あなたがたが行くべき道を知るためである。あなたがたは今まで、この道を通ったことがないからだ。」(同1章3,4節)。

私たちが立って進もうとするとき、その道がいつもの道なら迷うことなく進み行くことができます。私たちにとって昨日の延長線上にあるなら何ら迷うことなく今日という日を歩んで行けます。しかし、それが今までに通ったことのない道だったらどうでしょうか。立ったところまでは良いのですが、その次の一歩が踏み出せないのです。実はよく考えてみると、私たちは明日

のことはわかりませんから、常に未知の世界を前にして歩んでいるということになります。それゆえ、時には明日に向かって歩み出すことが不安になり困難になることがあるのです。

そのときに、私たちの前に立って先を歩いてくれる人がいたらどうでしょうか。私たちには先のことはわからなくても、先を知っている方が前を歩んでくださったなら、その方について行けば未知の世界でも進み行くことができます。今日取り上げた聖書テキストは 3:14-17 で、これは実際にヨルダン川を渡る場面ですが、実はその前の準備段階がとても大切なのです。神さまの臨在のしるしである「契約の箱」と民の立ち位置が重要なポイントになるのです。契約の箱は常に民の先頭に立っています。「彼らは契約の箱を担ぎ、民の先頭に立って進んだ。」(6 節)、「契約の箱を担ぐ祭司たちは民の先頭にいた。」(14 節)。契約の箱の後に民は続いています。「あなたがたは今まで、この道を通ったことがない」(4 節)と言われる神さまご自身が、民の先頭に立って歩んでくださるのです。今日から 2020 年が始まりますが、この年の始まりに神さまは私たちの前に立って、未だ通ったことのない道の先を歩んでくださいます。詩篇 65:11 に「あなたはその年に 御恵みの冠をかぶらせます。あなたの通られた跡には 油が滴っています。」というみことばがあります。これは、過去を振り返るとき、そこには神さまの恵みの足跡が残されているという神さまへの感謝のことばなのですが、これを 2020 年の締め括りに証するために、すでに神さまは私たちに年の初めから「御恵みの冠」をかぶらせて、「わたしについていらっしやい」と導いてくださるのです。

3. 信じて一歩を踏み出そう

こうしてイスラエルの民は契約の箱を先頭にして、ヨルダン川の東側まで来ました。最後に残された難関は実際に川を渡るという行為でした。ヨルダン川は雨季と乾季で異なる顔を見せる川です。時は「刈り入れの期間中」(15 節)とありますから、今の 4~5 月頃でしょう。ヘルモン山の雪解けで川の水は増水し、「どこの川岸にも水があふれていた。」(15 節)とあるように、人が渡れるような状況ではありません。

「渡る」ということは語るほどに容易いことではありません。まして目の前に不可能に思える状況が横たわっているとすればなおさらです。ここで問われるのが、私たちの神さまへの信頼です。12/29 の年末感謝礼拝の中でも触れましたが、神さまは私たちの前に困難や試練をもって来られることがあったとしても、私たちを悩ませるためではありません。「主が人の子らを、意味もなく、苦しめ悩ませることはない。」(哀歌 3:33) とあるように、神さまは私たちを悩ませることが目的ではありません。ヨルダン川渡河も同じで、カナン入国を目前にしてヨルダン川の前で失望を与えるために、この場面に導かれたのではないのです。神さまは今から目の前で起こることを見せ、神さまがいかにこの民を愛し、導こうとしておられるのかをしるしをもって証するために、民は今ここに立たせられているのです。さらに、そこにはヨシュアを次の指導者として確立させ、主がモーセと共におられたようにヨシュアとも共におられ、神さまの約束は決して絶えることがないという明確なメッセージがありました(7節)。

私たちが神さまに“ついて行きます”という信仰の表明をすると、事は動き出すのです。「箱を担ぐ祭司たちの足が水際の水に浸ると、川上から流れ下る水が立ち止まった。一つの堰が、はるかかなたツアレタンのそばにある町アダムで立ち上がり、アラバの海、すなわち塩の海へ流れ下る水は完全にせき止められ、民はエリコに面したところを渡った。」(16節) のでした。アダムの町は、ヨルダン川渡河の場所から北に約 25 km に位置します。私たちが神さまに従ってついて行きますという信仰の決断をするとき、人には考えられない神さまの奇蹟が実現するというのをこの年の中で経験したいと願います。このとき契約の箱を担ぐ祭司たちは、民が全員川を渡り終えるまで、川の真ん中に立ち続けました。信じて神さまについて行くなら、神さまは守ってくださるのです。

結び

神さまはヨシュアをはじめイスラエルの民に、そして 2020 年の年頭に立つ私たちに、ご自分の祝福の世界を見せたいと願っておられます。神さまは私

たちの目には見えません。目には見えませんが確かにおられます。その証拠としてヨルダン川渡河に見られる神さまのみわざを私たちにも見せていただきたいのです。「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」(ヘブル 11:1) とあるように、確かに神さまはおられるという信仰に立って歩みましょう。私たちの信仰の決断が実を結ぶ一年となりますようにお祈りします。そのために、川の中に留まり続けた契約の箱に表わされるように、主イエスさまの臨在がいつも私たちを支え、この年の始まりから終わりまでを守ってくださると信じています。インマヌエルの主と共にヨルダン川を渡り、神さまの恵みの世界を見せていただきましょう。